

2003. 11  
No. 234

# 千葉文化

CHIBA PREFECTURAL CENTRAL LIBRARY  
千葉県立中央図書館報

資料散策 52



「写眞週報」 1号（昭13.2）－375号（昭20.7）

昭和時代の戦中に、内閣情報部（のちの情報局）から発行された政府の広報誌です。写真を用い、大衆向けに国策をわかりやすく知らせる、ということが発行の趣旨でした。

内容は、やはり戦時色が濃いですが、戦地のことばかりではなく、国内での生活の様子や海外事情など幅広い事柄が扱われています。

[特集] 子どもの読書活動推進フォーラム

# 特集 子どもの読書活動推進フォーラム

国・都道府県・市町村などが一体となって子どもの読書活動を推進することを目的として公布された「子どもの読書活動の推進に関する法律」(平成13年12月施行)及び「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」(平成14年8月閣議決定)を踏まえ、千葉県では「千葉県子どもの読書活動推進計画」を平成15年3月20日に策定いたしました。

そして、その一層の充実を図るため、平成15年度は「子どもの読書活動推進フォーラム」を県内4箇所(中央フォーラム9月20日:千葉県文化会館小ホール、地域フォーラム東葛会場9月25日~26日:我孫子市生涯学習センター「アピスタ」、地域フォーラム海匝会場10月9日~10日:千葉県立東部図書館、地域フォーラム安房会場11月13日~14日:館山市中央地区学習等供用施設「菜の花ホール」)において開催しました。

この原稿は、中央フォーラム基調講演において、予定時間を超えて熱い御講演をいただいた島多代先生の講演会の内容を、先生に御了解いただいて、一部省略しつつ再現したものです。

## 講師略歴 島 多代氏(前国際児童図書評議会会長)

1937年東京生まれ。聖心女子大卒。出版社勤務を経て、米国議会図書館児童書センター・コンサルタントなどを歴任。90年国際児童図書評議会理事、92年同副会長、98年から02年まで会長を努める。現在、絵本資料室「ミュゼ・イマジネール」主宰。東京芸術大学非常勤講師。著書に『センダックの絵本論』(モーリス・センダック著 脇明子・島多代訳 岩波書店)、『ソビエトの絵本 1920-1930』(ジェームス・フレーザー 島多代共編)などがある。

## 「子どもと本の架け橋——IBBYの活動を通して」

### アメリカ議会図書館での体験

私は1960年から70年代に絵本の編集者をしておりまして、日本の絵本を外国に紹介するという部署になりました。そのとき、日本の言葉や絵が、外国の絵本編集者にどのように見えるかという課題に直面して、それをきっかけに、日本や日本人って何だろうということを常に突きつけられて、それを考えながら生活していました。

また子どもたちが小さかった頃、1960年代の半ばから4年間はニューヨークに住んでいました。それはベトナム戦争の真っ最中で、いわゆる先進国の実体というものをつぶさに見ることが出来ました。それから15年後の80年代には、高校生になった子どもたちを連れて、ワシントンに住んでおりました。その時にも、日本人である子どもたちがどのように育つべきか、自分とは何かという問題を常に突きつけられ、それを考えておりました。

また80年代のワシントン時代には、アメリカ議会図書館のコンサルタントをしていたのですが、その時の主な仕事は、議会図書館に眠っている膨大な日本の子どもの本の中から、たった300冊でしたが選んで、日本への架け橋を作ろうというプロジェクトに参加しておりま

前国際児童図書評議会会長 島 多代

した。そこで私は、日本の子どもの本のことや、さらには日本について、あらためて勉強させられたような気がします。作家であるとか、評論家であるとか、いわゆる日本の子どもの本に関わっている人たちがどういう考え方をもっているのか、非常に客観的な立場で勉強することができて、これは私にとって大変なプラスでした。

### 本を読むことの意味

そういう目で現代の日本を見ていると、日本の社会はあまり変わっていないのではないか、という気がします。でも一方では、それを変えるために本があるのかな、とも思うわけです。読書推進ということが盛んに言われていますが、目の前の社会だけが全部の社会ではないということを、私は何とかして子どもたちに伝えたいと思うのです。これから子どもたちが生きていくのは、日本だけではなく世界が相手だということになれば、世界に出て行く前に、まず個人としての自分を作らなければなりません。そして自分を作るということは、本を読むことによって助けられるのだということを、読書推進に関わっている人たちはよくご存知だと思います。それを子どもたちにどのようにして伝えるか。そこが問題なのです。

日本の社会を見ていて怖いと思うのは、様々な面で個人の意欲がコントロールされていて、社会全体のほうは優位に立っているということです。これでは個人としての自分がなくなってしまうのではないかと、私は最近、孫たちの姿を見ていて心配になります。個人の意識が抑えられて、社会の安泰のために個人が位置付けられてしまうのだとしたら、大げさに言えば、戦前の国民皆兵の時代と同じことです。それでは教育や読書は、良い兵隊や、良い社会の部品を作るためのものだということになってしまいます。

本来教育の目的というのは、個人の内的な訓練のためにあるものですね。どこにいても社会と個人には何らかの確執があって、誰もがその中で生きながら幸せの「青い鳥」を探すわけですから、生きてゆくことは大変難しい問題です。その人生がものすごく大変なことなのだとということを、今の大人たちは忘れているかもしれません。

ほんとうに人間が幸せになるためには、偏差値やお金のあるなしだけではだめだということを、私たちぐらいまで人生を長く歩いてくれば分かってくるわけです。自分を大切にしながら社会と折り合ってゆく。その技術を身につけるために教育があり、本を読む意味があるのだと私は思います。

### 読書の中で重要なこと

しかしまた、本のすべてがよいというわけではありません。極端に言えば、本は一冊でもよいのです。かけがえのない一冊の本にめぐり合える子どもは幸せです。何冊も読む必要はないでしょう。自分の好きな本、必要だと思える本に出会えた子どもたちはほんとうにラッキーです。ですから親でも先生でも図書館員でも、とにかく周りにいる大人たちが、本が好きだという姿、手離せない本をもっているという姿をどうやって子どもたちに見せるかが、読書推進運動の中ではもっとも重要なことなのではないかと私は思っています。

行政が、全ての人が本を読めるように環境を整える、図書館を整備する、それは必要な仕事です。でもそのことと個人が本を読むということは、ちょっと違うと思うのです。一冊も本を読まないで一生を終わる人がいても、その人の価値が下がるというものではありません。すべての子どもが読書に向かわなければないと考える思考のほうが、かつて本を読まない子どもだった私からすると、ちょっと違和感があります。読まざるを得ない引き換え条件がなかったなら、私もおそらく本を読まないで、マラソンか何かやっていたかもしれません。

反対にまた、今度はマラソンを諦めなければならない時に本に巡り会ったかもしれないし、一人一人の人生の時間はあまりにも違うわけですから、そのきっかけとし

て本があるのだということを子どもに教えることは、とても重要なことです。それをどのような方法で提示すればよいのかは、ひどく難しい問題ですが。

### 個人が選択できる社会

先ほども言いましたが、今の日本の社会は、個人の選択範囲が狭められていて、そのことによって全体の安定が確保されている社会なのではないかと思うことがあります。それが日本の社会の選択ということなのでしょう。それなりに安全で、極貧の人がいない平均的な社会。ホームレスの人でもちゃんと生活しています。そういう社会を自分たちが選んでいるとしたら、これから育つ子どもたちには、そういう社会のルールをはっきりと伝えるべきだと思います。そしてそのような社会に住むためには、強い度合いで自分をコントロールできなければいけないことを、大人は教えなければいけない。

その代わり、自分が人生を歩む上でどんなことがあっても戦いながら生きていこうと考える子どもには、日本の外にも世界はあるわけですから、彼らにとって世界への架け橋は、まさに本の中にあるのだということを教えないければなりません。本を読むことによって、日本以外にも様々な世界があるのだということが分かってくるわけですから。

そういう意味で、本に託されている役割は重大です。そしてその役割に耐える本を、子どもたちの周りにいる大人たちが、きちんと選んでやる義務があると私は思います。本なら何でもよいということには決してならないのです。

### 本は単なる商品か

この議論は、100年前のアメリカでにあったのです。第一次世界大戦の直前に全米の書店組合の大会があって、その時に声をあげたのがボーイスカウトの図書館長だったマシューズという人でした。彼は、「本は単なる商品でよいのか」という声をあげたわけです。

その翌年にも、彼はそのことを問い合わせました。しかし第一次世界大戦が始まってしまって、大会は数年間クローズしていました。でもそのマシューズの声で、みんなが目覚めたのです。そして第一次世界大戦が終わってからすぐに、アメリカのマクミランなどの大手出版社が、児童書部門を開設したのでした。その頃からアメリカには、ほんとうに良い本が生まれ始めたのです。

その中で非常に面白い現象は、アメリカの絵本界では、外国人作家の作品が圧倒的に多く作られたということです。それは革命であるとかナチズムであるとか、ヨーロッパ大陸の事情によって、極貧状態の東欧や北欧から、多くの人々がアメリカに逃げてきたわけです。その中で

絵の才能のある画家や詩人たちが、新しい絵本を描いた。

また一方で、打ちひしがれて國を逃れてきた外国の芸術家たちの文化的伝統をすくい上げたのが、アメリカの児童書部門の編集者たちでした。彼らは逆境にあった若い芸術家たちを鼓舞しながら、たくさんの絵本を作らせたのです。この編集者たちによって創られた輝くべき歴史は、アメリカ絵本の黄金時代の作品として、いまもしっかりと継承されています。

### イエラ・レップマンが残したもの

第二次世界大戦前、これらアメリカの編集者たちや、ニューヨーク市立図書館の有名な子どもの本の選書リストを作成していたアン・キャロル・ムーア女史と文通していたのが、石井桃子さんでした。そして石井桃子さんを戦後ロックフェラー財團に推薦して、アメリカの子どもの本の視察に送り出したのが坂西志保さんでした。最近日本では坂西志保さんが、戦後の子どもの社会教育に優れた貢献をしたということで再評価されています。

私がこの前まで会長をしておりました国際児童図書評議会（IBBY）の創始者イエラ・レップマンが敗戦後のドイツで果たした役割も、これと同じことが言えるのではないでしょうか。

ドイツでは、ナチ支配下の12年間は、自由を主張した本はすべて焼き捨てられていました。さらに子どもたちは、ナチの教科書を読まされていたのです。このように本というものは、ある意味では危険なものになりうるわけです。

12年間の大きな空白を経たのち、戦後イエラ・レップマンは、ドイツ全土をジープで回りました。そして廃墟の中で強く生きる子どもたちの生命力に感動するわけですが、この子どもたちを人間として教育するには、ほんとうに良い本が魂の栄養として必要だ、ということを感じます。

そして占領軍本部の会議のときに、婦人子ども問題のアドバイサーという立場から、「いま最初に私たちがやるべきことは『国際子どもの本展』です」と主張するわけです。占領軍の男たちは唖然とします。「食べる物とか安全とか住居問題ではなくて、なぜ『子どもの本展』なのか？だいいち予算がない」と言われました。それに対して彼女は、「予算はいりません。私がいろいろな国に頼りますから」と言ったらしいのです。

「歐米20数カ国のうち、ほとんどがドイツに敵対していたじゃないか。ドイツにこれだけ苛められた国々が、ドイツの子どもたちに本をという声に応えるわけがない」という意見にも、彼女はただ「やってみます」と答えて、徹夜でタイプを打って、各国に手紙を出すわけです。

いちばん最初にフランスから、「あなたの要請にお応えしましょう」と書かれた手紙が届いたとき、彼女はこれこそほんとうの「人間のなじうる良きこと」の証明だと感激して、これを「ヒューマン・ドキュメント」という言葉に書き残しています（『子どもの本は世界の架け橋』イエラ・レップマン著、森本真実訳、こぐま社刊）。

ただ一つベルギーだけが、「あなたたちの国にこれだけ痛めつけられた我々が、それにお応えするわけにはいかない」と返事をしてきました。それでも彼女は粘りました。

「だからお願いするのです。ドイツの子どもたちとベルギーの子どもたちがいっしょに未来を築くために、あなたたちの国で出版された素晴らしい本を、私たちの展覧会から省くわけにはいきません」と。彼女はものの頼み方が非常にうまかったと言われていますが、ともかく展覧会に向けて、各国から素晴らしい本がたくさん届いたのです。

### 本の鎖、本の架け橋

物語を見つけ出したり伝えたりすることは、全て人の役割ではありません。だから子どもたちに本を渡す立場にある人は、特殊な役割だと私は思います。全ての人はやらないけれども、これはやらなければならない意味がある。それを子どもたちに伝えてゆく。そしてそれを伝え聞いた子どもたちが、また次の物語を伝える人になってゆく、という循環なのだろうと思います。それがいわゆる「本の鎖」ということなのではないでしょうか。

暗殺されたマーティン・ルーサー・キングは、インドのガンジーを尊敬していたそうです。そしてガンジーがどんな本を読んでいたかを調べたら、ソローの『森の生活』が愛読書だった。そこで彼はすぐに『森の生活』を読んでみて、なぜ自分がガンジーを尊敬するのかが分かったということです。

考えてみると、人間は自分一代だけで生きているわけではないのです。受け継がれたDNAは自分たちの責任ではないけれども、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん、曾おじいさんたちから受け継がれているわけです。そういう自分の先祖がどういう人だったのかということを、いまの子どもたちはほとんど考えていない。少なくとも考えることを奨励されてはいません。その奨励されていない理由が、戦後の歴史の中に隠されているような気が、私にはするのです。

けれども、そういう家族のどんなに小さな歴史でも、いまの自分と関係があるのだということを考える子どもたちが、もっといてもいいのではないかでしょうか。自分を見つめ、考える力を養う、そこに本があるのだと私は思います。子どもと本のあいだに橋を架けるという意味も、そこにあるのではないかでしょうか。

## 中世文書 「正木頼忠書状」

### [はじめに]

紀州藩の家老であった三浦家に伝来し、当館の郷土資料として収集された最後の勝浦城主の「正木頼忠書状」について文書の伝来を交えて紹介したい。

### [正木頼忠家]

正木頼忠家は、里見が滅び、房総の地に活躍した武将が姿を消していった中で、一度は徳川氏の関東入国によって勝浦を追われたが、娘が徳川頼宣、頼房の生母となった家康の側室「お万の方」であった縁から紀伊家、水戸家、旗本へ子息の仕官が叶い、明治まで命脈を保った。

本文書が伝來した紀州の三浦家は、頼忠の二男でお万の方の兄である為春を始祖とする。為春は、慶長3年に家康に仕官し、その頃から正木氏の出自とされる三浦姓を名乗った。

### [正木頼忠書状]

本文書は「千葉県史料 中世篇 諸家文書補遺」に当館所蔵として収録されている。

差出人の頼忠は、勝浦城主の正木時忠を父に持ち、一時は、人質として小田原に行っていた。人質といつても、当時北条とは同盟関係にあって優遇されていたらしく、北条氏康の姪を妻に迎えている。

文書の作成は、天正13（1585）年頃と推定される。宛名の「右衛門佐」は、最近の研究から妻の兄弟と見られる。

書状は、鴈を送られたことへの礼と贈られて来た和歌への賞賛、自作の歌を記したもので、頼忠の持つ教養と、頼忠が房総に帰った後の北条氏との関係を知ることが出来る。

文書は、蓋に頼忠の剃髪後の号である「觀斎公御筆」と上書きされた桐箱入りで軸装であったが、損傷が激しいために近年に至って、一枚ものに表装をし直し、台紙をつけて箱と分離された。

### [文書の伝来]

箱書には、本文書は、宝暦6（1755）年には安房の小網寺で所持していたが、正木氏の先祖の筆跡ということで、同年11月に律乗院の手を経て三浦氏の所蔵するところとなった。そして翌年5月には軸装が出来上がったこと等が書かれ、文書の伝来が判る。

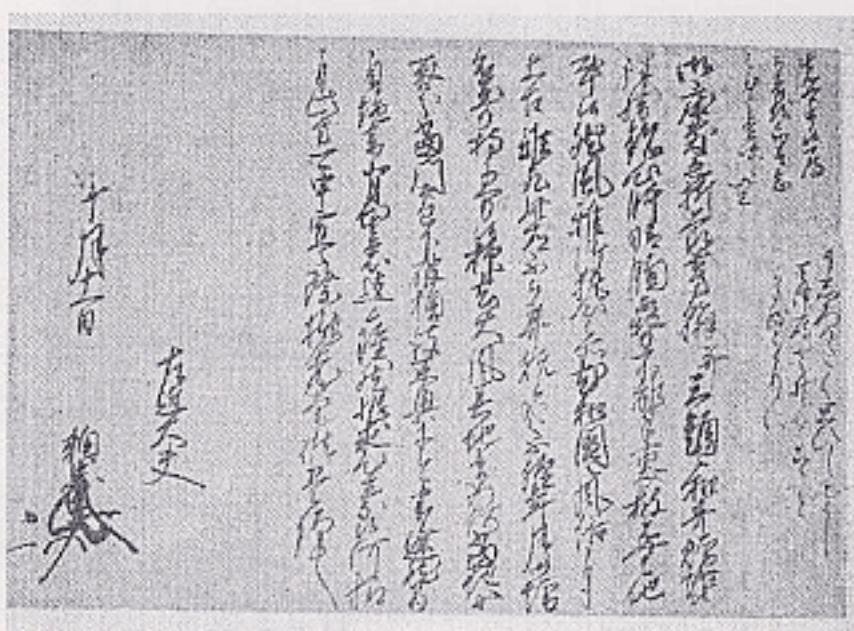
当館では、中世史料の県外所蔵調査をしていた県史編纂室から得た情報によって、昭和39年に和歌山市の吉井書店から購入した。

### [郷土資料として古文書を収集]

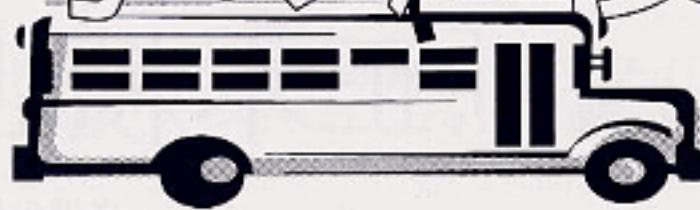
日本図書館協会は、昭和38年に「郷土の資料を図書館に集めよう」という全国運動を展開し、近世史料の整理研修会を開催した。郷土資料室ではこれらの動きを受けて、類縁機関と関係団体で構成する「収集委員会」の開設を構想した。これは、図書館の新館建設を控えていた時期と重なって実現には至らなかったが、「正木頼忠書状」が所蔵される背景となった。

図書館の古文書収集は、文書館と博物館が整備された今日、収集した多くを両機関に引き継いでひとつの役割を終えた。

付記 本文書の獲得に奔走された渡辺晨氏の多岐に涉るご教示に感謝致します。



# ひかり号の歴史



## はじめに

「はずむわだちにあこがれ乗せて“ひかり”はゆくゆく」で始まる「ひかりの歌」というのがあるのをご存知だろうか。作曲者はあの團伊玖磨である。この歌は、昭和24年8月に全国にさきがけて誕生した千葉県の移動図書館車ひかり号の歌である。

作詞は懸賞募集で一等となった長生郡東村の並木杏子さんで、翌年レコーディングされた。

県民に愛され、親しまれ、図書館の民衆化に絶大な効果を發揮した、ひかり号は、全国にも移動図書館ブームを巻き起こした。



“ひかり”の歌吹込み風景  
(ピクター社スタジオにて)

今回、千葉県の移動図書館車「ひかり号」について、その歴史を振り返ってみたい。

## ひかり号誕生まで

移動図書館は、アメリカメリーランド州ワシントン郡立図書館の、メアリー・チトカム嬢によって始められたコンコード馬車が世界で最初といわれている。

千葉県では、明治40年、時の県知事石原健

三が、千葉県通俗巡回文庫を実施し、馬車に図書を積んで運搬し、図書の貸出が行われた。

その後、県から巡回文庫を引き継いだ教育会図書館は経営難におちいり、これをとりやめるが、巡回文庫に関する啓蒙運動を積極的に行い、県立図書館設置へと気運が盛りあがっていった。

東宮殿下御成婚を奉祝する記念事業として、千葉県図書館は大正13年設立認可され、3月に開館した。

初代館長甘日出逸曉は、県立図書館の書物をすべての県民にという熱意のもと、千葉軍政部報道課長のリンドバークや運輸省、千葉道路管理事務所長などの協力で、米軍払下げの自動車ダッヂウェポンキャリアをもらい、これを改装して、わが国初のブックモビルに仕立てあげた。ひかり号は、米国の雑誌 Library Journal にも紹介された。

## ひかり号の活躍

ひかり号の巡回は昭和24年、市原、夷隅、長生地域を対象に開始され、昭和27年には、3台となり、全県24コース、305ステーションとなり県全域の巡回が可能となった。昭和28年度には、貸出冊数約12万9千冊を記録した。



ひかり1号車

昭和30年前後の県財政の危機的状況は、県立図書館運営の合理化の気運を高め、昭和36年配本所が設置され、直接貸出から間接サービスへと切り替えが行われた。市町村図書館の設置を促すため、公民館図書室等の施設に対し、1,000冊以上の図書を長期貸出し、読書普及の効率を高めることを目的とした。

昭和38年以降、市町村図書館の動きが活発化し、新設館も次第に増えていった。



ひかり3号車

県立図書館も昭和43年9月新館が開館した。図書館未設置地域に対し重点的にひかり号を巡回し、他の図書館へは、資料援助という間接サービスに力を入れた。

昭和47年には、ひかり号は根本的に運営方針を転換し、県立図書館が直接に各ステーションを運営してきた方法を改め、県立図書館ー市町村教育委員会(図書館)ー利用者という結びつきの中で活動することとなった。

昭和48年度には、市町村の読書施設に対し、一括貸出制度が実施された。これにより、従来の配本所は移動図書館の施設ステーションに発展的に再編され、44の施設ステーションを数えることとなった。

昭和52年10月には、新規事業として図書館協力車の巡回が始まり、その進展とともに、ひかり号は次第に縮小の傾向となっていく。

昭和55年度、ひかり号巡回ステーションを大幅に削減し、県立中央図書館から30km圏内の市町村読書施設については、来館方式による定期貸出しに切り替えた。これまで3台あったひかり号を2台にした。

昭和57年度には、館外奉仕用に図書の電算処理が可能となった。

### 直接サービスから間接サービスへ

昭和59年度、ひかり号のサービス方法を住民への直接サービス(一般貸出しステーション

での直接貸出し)から読書施設への間接サービス(公民館、教育委員会への施設貸出し)へと重点の移行を行った。こうして市町立図書館と県立図書館の役割分担が明確化されていく。

昭和60年度、ひかり号の運営方針を、各市町村内における図書館サービスは各市町村で行うことを原則とし、1市町村に対し、1か所の施設貸出しステーションを、読書施設のない市町村には、1か所の一般貸出しステーションを設置することとし、1市町村1ステーションの形となつた。2台のひかり号も1台になつた。

昭和61年度、一般貸出しステーションが全廃され、施設貸出しへの移行が完了した。ひかり号の巡回は図書館未設置市町村の施設のみとなり、図書館設置市町へは臨時貸出のみになつた。

昭和62年度、移動図書館の対象は図書館未設置市町村に限られ、図書館設置市町への臨時貸出しも廃止された。

以後、公民館図書室等の読書施設を対象に来館方式と移動図書館車による巡回方式に区分して、資料提供を行ってきた。

### 最後のひかり号

平成8年度には、移動図書館車による巡回方式の見直しを図るとともに、新たな支援体制について、検討がされ、平成9年度には、来館を主とする新たな支援体制を実施した。48年間走り続けたひかり号はここに終息したのである。最後のひかり12号は千倉町に譲与された。

図書館未設置市町村支援事業としては、来館及び拠点館による協力車による配本の2通りとしてその後も続けられている。

現在では、市町村図書館の支援を目的として、リクエスト本などを、図書館協力車が提供していくサービスが主流となっている。



ひかり12号車

## ジェトロ・ アジア経済研究所図書館 ルポルタージュ千葉52

幕張メッセの近くに興味深い図書館がある。ジェトロ・アジア経済研究所図書館がそれである。

発展途上国の経済、政治、社会に関する基礎的、総合的な調査研究活動を実施している研究所の図書館である。

平成11年12月に新宿から幕張新都心へ移転してきた図書館で、誰でも利用できる。ただし閲覧のみで貸出は行っていない。中に入るとまずカウンターで入館カードに所要事項を記入して閲覧可能になる。1階から4階まで閲覧でき、1階には新聞、雑誌類が置かれている。館内は片側前面がガラス張りで4階まで吹抜けになっているので明るく、また広く感じる。2階は和書、洋書、中国書を中心に置かれ、3階は洋書、統計資料、4階は発展途上国諸言語資料、製本雑誌が置かれている。入館者数は年間約6千人で、学生や研究者が中心となっている。

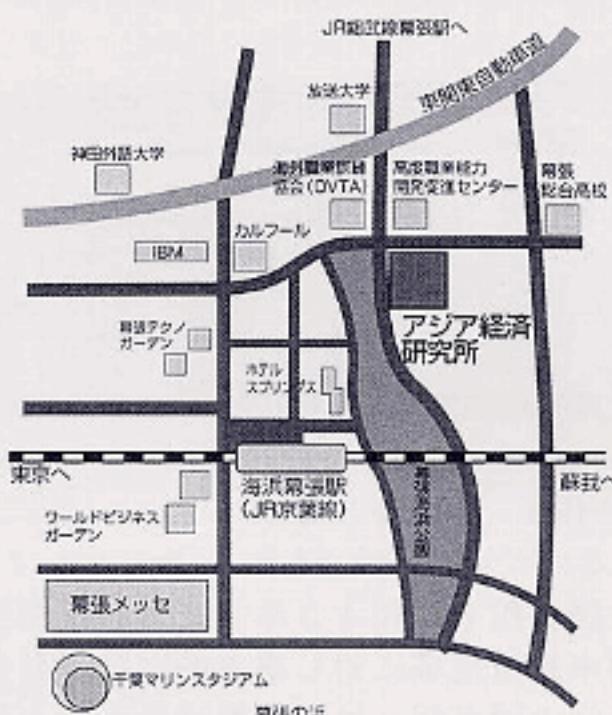
蔵書構成は、単行書、統計資料等53万冊、新聞296タイトル、雑誌3,299タイトル、地図52,596枚、マイクロフィルム75,181リール、ビデオテープ310タイトル、CD-ROM、FD461枚（平成15年3月末現在）となっている。

北朝鮮やイラクの新聞や雑誌が目を引いた。詳しく知りたい方は、ホームページアドレス

<http://www.ide.go.jp/Japanese/Library>  
を開いてみてください。



### 交通案内



● JR京葉線海浜幕張駅から徒歩約10分

● 開館時間 10:00から17:30まで

● 休館日

第2、4、5土曜日、日曜日、祝祭日、毎月末最終日（当日が土・日・祭日にあたる場合は直前の日）、年末年始

## 編集後記

今回は子どもの読書活動推進フォーラムの特集を組みましたがいかがでしたでしょうか。子どもの読書離れがさけばれて久しくなりますが、これを機に読書に親しむ姿が見られるといいですね。

- 開館時間：一般資料室 火曜日～金曜日／9:00～19:00  
土曜日・日曜日・祝日・休日／9:00～17:00  
千葉県資料室・新聞雑誌室・児童資料室／9:00～17:00
- 休館日：月曜日（ただし、祝日・休日にあたる場合はその翌日）
  - ・第3金曜日（ただし、祝日・休日にあたる場合はその前日）
  - ・年末年始（12月28日～1月4日）・特別整理期間

千葉県立中央図書館 TEL043-222-0116  
<http://www.library.pref.chiba.jp>  
〒260-8660 千葉市中央区市場町11-1

